

当麻 in · Dreamland

当
麻
i
n
·
D
r
e
a
m
l
a
n
d

敦賀市立沓見小学校

六年

山 やま 田 だ ひか
山 やま 口 ぐち 莉 り な 留 る
浅 あさ の ゆ か り
野 の 有 佳 里
西 にし 田 だ 静 せ れん 恋



各務原市立稲羽東小学校

六年

小 お の ぎ も え
野 の 木 萌 恵
千 ち でん たま の
傳 珠 乃
に わ な つき
丹 羽 菜 月
横 よこ やま こ はる
山 やま 呼 春

二〇一〇年、多分フランス、とある街……というか分からない。

「ここはどこなんだ——」

オレ、上坂当麻はうめき声をあげる。周りは外国人ばかり、みんながジロジロとオレを見てくる。なぜこんなことになったかと言うと、話は一時間前にさかのぼる……。

—東京—

今は子どもたちが大好き、いやあるいは大嫌いな夏休みだ。オレは宿題をしていた息抜きに、ちよつと散歩をしていたところ、なぜか木にぶつかった。下に穴が開いていたので、ちよつとのぞいてみよつかなくと、軽い気持ちでのぞいてみたら落ちてしまった……。

「NO……」

（ここは何の世界なんだ。アリスですか？ それともなんだ？ 最近アニメ

でよくある、タイムスリップってやつですか？)

落ちたところには、外国人がいっぱいいて、みんな(なんだこいつは?)と
いうような感じでオレを見てくる。とりあえず言ってみた。

「ボンジュール」

また周りの人が、なんだこいつという目でオレを見てきた。とりあえず歩いて
いると、警察が話しかけてきた。言葉は……全く分からない。

「……」

「アイ・ドント・ノオー。ジャパニーズ。人間です。迷子です、多分」

やっぱりあっちも意味が分からないようだ……。どうするオレ、ガンバレ、
オレ!!

「ノーマナー、ノーマナー、ヘルプミー……」

やっぱり、なんだこいつという顔をされた。どうしよう。不幸だ。何でこんな
ところで……。

察に言っていたのか……。一生のはじだ……。

「だいじょぶYO！ ついてきてYO！」

なにかもがあやしいおっさんだが、オレはついて行くことにした。知らない人についていっちゃだめだよ！ なんて知ったこっちゃない。

「ここーはフランスパンが有名なパン屋だYO！ フランスパンはどこにでも売っているけどYO！」

と、おいしいお店の情報をあれこれ教えてくれた。

「だからノーマネー、ノーマネー」

歩いているうちにきれいな家に着いた。

「ここは私の家だYO！ あっ、紹介が遅れたYO！ わたーしの名前はー、ウチャードだYO！ あだ名はウツチャンだYO！」

はい……。ウツチャンですか……。

「わたーしには今日たん生日のむすめが二人いるんだYO！　祝ってくれYO！」

何でいきなり会った人に、おめでとーなんて言わなくちゃいけないんだろうか……。まあ、適当に言えればいいか。

「おめでとさーん」

「？」

二人は首をかしげる。あつヤバ、二人はフランス人だったんだ！　オレはがんばってジェスチャーを試してみた。(できるだけ)にこやかに笑ってはく手をしてみた。そしたら通じたみたいで、あつちも笑ってくれた。ちよつと安心。

「わたーしのむすめ、超かわいーだろう？　名前はカグーラとヤグーラって言うんだYO！　特技があるんだYO！」

(※ここからはフランス語……日本語にやくしまーす)

「カグーラ、ヤグーラ、お兄ちゃんに見せてあげなYO！」

「はい」

(※内容はウツチャンが日本語でオレに教えてくれます)

どんなのだろう……とオレ、当麻が思っていると、

「どうもどうも」

と家の舞台から二人が出てきた。

「カグーラ」

「ヤグーラ」

「でーす」

「コント！ すこんぶ！」

「オイッ、すこんぶたべるかヤグーラ」

「食べてみたいな」

パクパクパク……。

「なにこれ！ レモン百個よりもすっぱいよ！」

「つて、レモン百個も食べたことあるんかい！ でもそのうち、すこんぶもくせになるよ」

「プツハハハ」

オレは思わず吹き出してしまった。

「ありがとうございますー」

二人そろって言った。

「おっ、そうだYO！ お前の名前聞いてなかったYO！」

「オレ？ オレの名前は当麻、よろしくな」

「よしトーマ、今夜はわたーしの家でとまっていけ」

「えっ、いいんですか？」

「これもなにかのえんだ。しっかり休んでいけYO！」

「サンキュー、ウツチャン！」

オレは不幸ではなかったらしい。こんなにも親切にしていただけなんて…。

でもオレはまだ知らなかった。この街で起きている、大きな事件を……。★

オレは、だれかに肩をたたかれている。ウツチャンの声がする。

「トーマ、朝だよ。起きて」

どうやらもう、朝みたいだ。まだねむい目をこすりながら、起きあがる。フランスに来てから二週間。カグーラ、ヤグーラとも仲良くなり、毎日コントを楽しませてもらった。

その日、ウツチャンとオレは散歩に出かけた。ウツチャンが公園のトイレに入ってしまった。オレはその間、近くをうろついていた。すると……。

「キヤー、だれかー、警察を呼んでー」

周りの人が叫んでいる。オレは、意味が分からなかったけど、ここにいちやいけないと思った。でもだれかに手首をつかまれた。ウツチャンだと思いふり向くと、知らない男が立っていた。その手には銃!? ちょうどその時、トイレから出てきたウツチャンがオレ達に気づいた。ウツチャンは動揺している。で

もすぐにウツチャンは冷静になって、携帯で警察に連絡しようとした。その時、オレを人質にとっている男が、

「警察に連絡したら、こいつの命は無い」

と、ウツチャンをおどした。もう警察に連絡する手段はない。オレはもう死んじやうのか。もう、助かる手はないのか……。

その時警察がやって来た。しかし、男はオレを放そうとはしない。警察が犯人に声をかけた。

「ゴット・フリード。今すぐ銃を置け。おまえは指名手配中のゴット・フリードだな？」

その時ウツチャンが、

「お前がゴット・フリードか。さあ、早く当麻を放せ!! お前が当麻をうてば、お前も警察にうたれるぞ」

「何だと? ふざけるな」

ゴット・フリードとウツチャンの言い合いが始まり、だんだん激しくなっていく。そのスキに警察がゴット・フリードに近づいていき、取りおさえようとした時、「パンッ」と銃声が聞こえた。振り返ると、ウツチャンが肩から血を流してたおれていた。

「ウツチャン!! ウツチャン!!」

オレは、かけよってウツチャンの名前を必死で呼び続けた。ウツチャンは救急車ですぐに運ばれていった。

「ガチャッ」ゴット・フリードはその場でたいほされた。

病院ではウツチャンの手術が終わり、医師が出てきた。

「ウチャードさんは無事です。が、肩がまだ自由に動かないので、完治するまでには時間がかかります」

「ちなみに、完全に動けるようになるまで、どれくらいかかるんですか」

「だいたい、一カ月前後です」

オレは、一カ月も、ウツチャンがいない生活なんて考えたこともなかった。オレにできることといえば、毎日会いに行くことや、カグーラ、ヤグーラ、ウツチャンの家を守ることぐらいだ。

オレは、ウツチャンにお見まいを用意しようと考えた。

(フランスでは、どんなものを持って行くんだろう……)

オレは見当もつかなかったから、少し遠いが、図書館に行つて調べたことにした。たくさんの本が並ぶ中で、目にとまった本があった。『病院・お見まい』オレはその本を手にとって、パラパラとめくってみた。すると、本から、サツと一枚の紙が床に落ちた。その紙を拾ってみたら、何と日本語が書かれていた!! オレはその内容にもびっくりした。何かの日記の一ページだった。

『七月一日、オレは、散歩していたら、木の根もとの穴に落ちてフランスらしき所へ来てしまった。訳がわからないが、どうすれば帰れるのか発見したので、文章に残して、だれにも見られない場所にかくした。忘れないように、地図も

残しておこう』

と、日記に地図も書いてあった。

(これはっ!! まさにオレのパターンだ! 同じ目に合った人がいるとは!)
とにかく行って見ることにした。

(ここのはずなんだけど……)

地図の目的地に着いたら……何か見覚えがある。

(ここは!? フランスで一番最初にオレが来た場所だ)

オレは、びっくりした。でもうれしかった。東京へ帰るのに一歩近づいた。
手ばかりを見つけないでは。オレは辺りをほりまくった。

一時間は経っただろうか。カツンツ。オレのつめが金属に当たった。ほり出してみると箱が出てきた。古い物なのだろうか。かなりサビついている。とにかく開けてみると、二枚の紙が出てきた。一枚を開くと、

『よくぞ見つけた。君は日本人なんだろう。帰りたいたらオレの指示に従って

くれ。満月の夜、ある場所にある木の下に立つんだ。そして日本語で帰りた
場所をゆっくり三回言うんだ』

ある場所とはどこか。それさえ分かれば。オレは、箱の中にあつたもう一枚
の紙を見た。

『その場所とは、お前が立っている所から、まっすぐ北を見ろ。そこに大きな
木があるはずだ。ま、幸運をいのってる』

オレは感激した。だれが書いた物か分からないけど、大きな手がかりになっ
た。

それから二週間が経った。今日はウツチャンが退院する日。見つけた手がか
りを、ウツチャンに話してみた。ウツチャンもおどろいていたが、喜んでくれ
た。けれども何かさみしい。もうウツチャンに会えなくなる。でも帰らなきゃ。

オレは東京の場所を思い出そうとした。

(森……公園だった……緑の公園だ!!)

やっと思い出した。もう、準備はできたから、あとは、満月の夜を待つだけ……。ウツチャンと過ごす時間もだんだん短くなってゆく……。

そして、今日は満月の夜。当麻は北を見て言った

「緑の公園、緑の公園……緑のこう……えん……」

「当麻、本当に別れの時が来たんだな……」

「ああ。今までありがとう。元気だな」

目の前に現れた穴に、オレが入ろうとした時、ウツチャンがネックレスをくれた。お礼を言って、穴に入った。道のような所を進んだ。

先に光がある。

東京？

なぜか、自分のベッドの中で目が覚めた。

でも、オレの手には、ネックレスがあつた。